

川崎医大小児外科

ニュースレター No.7

立春を過ぎ、徐々に日が長くなっていくのが実感されるこの頃です。今年は暖冬のせい、ほとんど雪も降らず比較的穏やかな日が多いようで、このまま春になってくるのかな、という気がします。

【講演会のお知らせ】

2月14日午後7時から岡山市の小児科専門医会で講演をすることになりました。場所はレストラン西川です。土曜日の夜ですが、お時間がある先生は是非おいで下さい。講演の内容は漏斗胸に対する低侵襲手術（Nuss法）に関してですが、その他にも川崎医大の小児外科で取り組んでいることなどをできるだけ小児科の先生方の目線に立ってお話したいと思います。また、小児外科に関するご質問などがありましたらどしどしお寄せ下さい。

昨年からはじめたこのニュースレターで多くの小児科の先生方に情報をお届けすることができ、それなりに御評価いただいておりますが、できたら直接お会いしてお話をすることが一番いいと考えております。この度の岡山市小児科専門医会は非常にいい機会であります。多くの先生方にお会いできることを楽しみにしております。

【川崎病院での小児外科外来】

もう一点、お知らせがあります。この4月から中山下の川崎病院で小児外科の外来を開設することになりました。当座は毎週火曜日の午後植村が担当いたします。外来を開いても患者様にはなかなか周知されにくいと思いますが、岡山市内の小児科の先生方には専門的な立場からお役に立てるのではないかと思います。小児外科の方で診療を希望される患者様がおられましたら、是非ご紹介くださいますよう、お願い申し上げます。

【小児政策医療研究会】

皆様は小児医療政策研究会というのをご存知でしょうか。その第4回目の会が先月東京で行われ、私も参加してまいりました。今回の会長は東京大学小児外科教授の岩中先生で、そのテーマは小児医療の連携ということでした。小児医療は小児科を中心に外科系各科、放射線科、麻酔科など広い範囲の診療科で成り立っております。また、そこに看護も加えますと非常に裾野が広く、それぞれの立場で別々に小児医療を論じても大きな流れを作ることはいかならないため、お互いに連携して小児医療をより良くしていくことを論じるべきであるという趣旨でした。この研究会に参加していくつか大変興味深いことを聞いてきました。

一つは小児看護の立場から看護学会では現在の医師不足に対応する方法として米国の assistant physician という制度を参考に、日本でも看護師の方に専門的な研修をしてもらい、医師の仕事を補助する資格を作ろうという動きがあるようです。もちろん、現在でも専門看護師、認定看護師の制度がありますので、その制度をもっと充実していくことも必要だと思います。しかし、限られた範囲ではありますが、処置や処方といったところまで行えるような資格を与える制度なども検討されているようです。救急の分野では初期のトリアージを行うことや在宅の診療など、人手が足りないところで活躍してもらえれば、医師不足の一面を解決できると期待されます。



もう一点、非常に面白い話を聞きました。皆様もご存知と思いますが前環境大臣、鴨下一郎先生がこの会に講演にこられました。鴨下先生は医師であります、自民党の要職にあり、政策決定に大きな力がある方です。現在、医療、社会福祉にかける国家予算は限られており、今後増大する医療需要に十分対応できないことが指摘されています。これを増やすことは簡単にはできません。そして、小児医療分野にまわす予算も以前より少しは改善の方向にあるとは言え、限られたパイの取り合いでは限界があります。それではどうしたら予算を増やせるか、その政策決定の流れをお話いただきました。

政府が予算を決めるときに「骨太の方針」をまず決めるのですが、ここに小児医療の充実とか少子化対策などといった言葉を入れることができれば、それに沿った政策や予算を入れるのだそうです。どこの部署でも予算は欲しいわけで、これには大きな力がないと取り組めないのですが、世論を味方に付け、少子化大臣（小淵優子）もいることなので、こちらから予算を増額するようにしたらいい、というのが大筋の話でした。

政治家に圧力をかけられるような人が小児医療の現場にいるか？と聞かれてもおぼつかないのですが、ここを動かすことができればいいのに・・・と思うことでした。

話題提供：おしりの病気

外科をやっていると、外陰部や肛門の疾患を診る機会があります。幸い、成人とは異なりこどものおしりを診ることはいやではありませんし、赤ちゃんのおしりなどは少々汚くても「可愛い」と思えるので私は好きです。

こどものおしりの病気と申しますと、鎖肛というのがありますが、これは生まれてすぐに見つかるため、あまり小児科の先生方には馴染みが無いかもしれません。今回はこの鎖肛の話ではありません。

今回は赤ちゃんにできる肛門周囲膿瘍という疾患について簡単にまとめさせていただきます。

肛門周囲膿瘍（別名；乳児痔瘻）は乳児期早期に肛門の3時から9時にできるものです。初期には皮下の硬結、発赤があり、徐々に痛くなります。大きな膿瘍を形成することもよくみられ、皮下に膿が溜まると切開排膿が必要となります。我々の所にはこうなったところで紹介されることが多いのです。

さて、乳児痔瘻の治療ですが、抗生剤の内服は炎症が高度でなければ通常は不要です。逆に抗生剤で下痢が生じたら「痔」はますます悪くなります。また、肛門周囲に抗生剤軟膏を使ったり消毒剤を塗ったりするのもあまり意味がないと思います。痔瘻の原因は肛門の中から細菌が crypt の方へ入っておこると言われており、皮膚表面に抗生剤を塗っても効果は期待できません。

私は便の性状を改善させることが重要だと思います。よく母乳栄養児で排便回数が1日に5回以上になることがありますが、やはり痔には悪影響を与えます。便性を改善させることが必要なので、整腸剤をよく使います。

切開排膿したら傷口が塞がらないよう、毎日膿を絞り出すようにします。これを続けると2-3ヵ月程度で治癒しますが、悪化したり別のところに出たりします。1歳を越えて治癒がみられなければ難治性と考え、場合によっては手術を考慮することもありますので、ご紹介下さい。

このニュースレターをメールで配信ご希望の方は下記のアドレスへご連絡下さい。

uemura@med.kawasaki-m.ac.jp

また、患者さんのご紹介は緊急の場合、病院代表（086-462-1111）へお電話していただけるか、上記のアドレスへメールで紹介していただいても結構です。時間外、休日はon callが待機しておりますので、病院代表へご連絡下さい。

平成21年2月
文責 植村貞繁